

Title	宮沢賢治「ざしき童子のはなし」論：「田舎」を巡る物語
Author(s)	服部, 峰大
Citation	阪大近代文学研究. 2023, 21, p. 34-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91399
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

宮沢賢治「ざしき童子のはなし」論

——「田舎」を巡る物語——

服部 峰大

一 「ざしき童子のはなし」の独自性

「ざしき童子のはなし」は一九二六年二月一日発行の雑誌『月曜第二号』に掲載された宮沢賢治の作品である。

本作は東北地方で妖怪、家の神として知られる座敷童を題材とした短編で、四つの座敷童に関する話から成っている。これまで本作には、「民話の再現、口碑そのもの、文学的表現」⁽¹⁾、「これはめずらしく、作品化されていないノンフィクションである」⁽²⁾、「賢治の作品としては稀といえる民話に粉飾をほどきさない作品で、フオークロアへの意図が明瞭」⁽³⁾など、民話的な題材を殆どそのまま作品化したとの評価がなされてきた。一方、乙骨淑子は本作に漂う東北の雰囲気、詩的表現を認めながらも、「本作に「大きく心をゆすぶらさられる何ものもない」との評価を与え⁽⁴⁾、それに対し続橋達雄は本作の魅力が「(異空間)と現実空間との微妙な交錯」にあると指摘した⁽⁵⁾。近年においても本作の異空間から賢治の世界存在

論が読み取られていることが確認できる⁽⁶⁾。

だが、民話を題材とした賢治作品は他にも散見され、異空間が描かれる作品も珍しくはない。入植者と森の関係を描いた「狼森と笹森、盗森」、春の訪れを描いた「水仙月の四日」、山男を題材とした「山男の四月」、地元の舞踊をモデルにした「鹿踊りのはじまり」。本作発表以前に発行された単行本『注文の多い料理店』(杜陵出版部・東京光原社発売一九二四年一月)に収録されたこれらの作品は、どれも民話や伝統芸能をモデルとしながらも明確な異化が行われ、いかにも物語として作られている。一方で本作はノンフィクションとの評価も見られるように、一見すると地方で集めた民話の報告のようにも読むことが出来る。

また、本作は賢治が生前に雑誌発表した数少ない作品の一つでもある。賢治が作品を掲載した雑誌には独特の編集方針を持った雑誌が散見される。本作が掲載された『月曜』も一風変わった編集方針を持つ意欲的な雑誌だ

った。賢治は『月曜』に、「オツベルと象」(第一号)、「ざしき童子のはなし」(第二号)、「寓話猫の事務所」(第三号)と三作品を連続して発表している。これまで本作を除く他『月曜』掲載作には同時代との関わりが指摘されてきた。「オツベルと象」には大正末期のプロレタリア文学隆盛期の時代思潮が指摘され⁽⁷⁾、「寓話猫の事務所」では緊縮財政による郡役所廃止問題との関わりが論じられている⁽⁸⁾。これらの同時代と関わりの深い二作に挟まれた本作は、単純に東北の民話や賢治らしい異空間を描いただけの作品だったのだろうか。本作にも他『月曜』掲載作のような同時代との関わりは読み取れないだろうか。

本論では、本作が雑誌『月曜』が想定していた読者にどのように読む事が出来たのかを本作独自の座敷童表象から探る。雑誌の想定読者に可能であった読みを探索することで、同時代と本作の関わりを探り、本作が大正末年の都会の大人に「田舎」を示す作品として読めた可能性を示す。また、民話的と評されてきた本作ではあるが、その舞台とされる花巻では大正末年から昭和初期にかけて観光産業が勃興していた。観光産業が創り出した「田舎」と本作が描く「ぼくらの方」にはどのような差異があったのか。これらの考察は、本作が大正末年における「田舎」を巡る作品の一つであり、都市空間と観光産業とい

う大正末年の問題と深く関わっていたことを明らかにする。

二 「ホツと気を抜く」大人の「童話」

本作が掲載された雑誌『月曜』は詩人尾形亀之助が中心となって創刊された雑誌である。本誌は全六号で廃刊となり、五、六号は自費出版で出版されるなど、商売としては上手くいかなかった。本誌掲載に際して、尾形と賢治の間にいかなるやり取りがあったのかは定かではない。ただ、第一号から三号続けての作品掲載からは、賢治が本誌への作品掲載に精力的に取り組んでいた様子が窺われる。

では、雑誌『月曜』はどのような雑誌だったのだろうか。尾形は第一号「編集後記」で『月曜』の目指す方向性を以下のように説明している。「ひろい意味での童話なのです。わたし達がいろいろとわづらはしい生活の間に、ホツと気を抜くのいゝ読み物だと思ひます。(中略)子供の読み物に童話といふものがあるがそれにあてはまる大人の読みもの」⁽⁹⁾。『月曜』は「わづらはしい生活」を送る大人を読者対象とし、それらの人々が「ホツと気を抜く」ことが出来る作品掲載を目指していた。

『月曜』が発表された大正末年は工業化が進み都市部が

発達した時代であった。第一次世界大戦による大戦景気は国内の工業化を促し、製造工業の産業生産額は一九一二年から一九二六年までに約四倍の増加をみせた⁽¹⁰⁾。

大都市周辺には工場地帯が現れ、そこで働くために農村部などから労働者が都会へと移動することで、都会への人口集中が起こっていく。『月曜』が読者対象とした「わづらはしい生活」を送る大人とは、このような社会状況の中で都市部に移動し、忙しい疲れた日々を送る人々を指していたはずだ。『月曜』は大正末年の都会への人口集中を背景に作られた雑誌であった。

尾形は第一号「編集後記」で「童話」という言葉を使い雑誌の方向性を明らかにしようとした。一方で次号の「編集後記」では、「はじめに、本誌のある一つの内容の説明に童話といふ「言葉」をつかつて、執筆諸家に可成り御迷惑を掛けたことは、全く御詫びする次第です。」⁽¹¹⁾と、この言葉が執筆諸家に誤解を与えたことを詫びている。この尾形の謝罪からは、第一号発刊前に作家たちに編集方針が知らされていたこと、しかしその方針がうまく理解されず、第一号発刊後何らかの形で軌道修正が図られたことが窺われる。このような編集方針を巡る事情は本作にも影響を与えていたはずだ。

本論では、ここまで考察してきた都会の大人という雑誌が想定した読者像から本作を読む。勿論、実際にどの

ような人が本誌を読んでいたのかは判然とせず、想定とは異なる読者が存在したことも想像に難くない。ただ、『月曜』は大正末年の都市化を背景に作られた雑誌であった。掲載誌の方針から本作を読むという本論の試みは、発表当時における本作の読みの可能性を示すと共に、その背景にあつた様々な社会問題を浮かび上がらせる。

三 都会の欲望を満たす座敷童

本作の題材となつた座敷童は、現在、テレビや小説などを通じて広く知られた存在である。座敷童と聞けば田舎や旧家を連想する人は珍しくないだろう⁽¹²⁾。

田舎や旧家を連想させる座敷童という題材は『月曜』の目指す方向性と合致しているように思われる。しかし、本作が発表された大正末年、座敷童に対する認識は現在とは異なるものだった。

本作が座敷童の専門家であつた佐々木喜善の目にとまり、そこから佐々木と賢治の交流が始まったことは既に知られている。佐々木は本作を、「奥州はザシキワラシの本場です。でも何故か皆さんが気をつけて居てくれません。(中略)私の気がついて居る範囲内では三年ばかり前の「月曜」といふ雑誌で、宮沢賢治氏と云ふお方が多分花巻辺のことだらうと想像されるザシキボツコの話を一

節発表になられて居ります。」(13)と紹介している。ここで佐々木は本作を紹介しながらも座敷童が注目されていない世情を嘆いている。座敷童譚の収集に力を注いでいた佐々木のこの言葉からは、大正末年において座敷童が一般的には無名の存在だったことが窺われる。大正末年、座敷童は現代のように誰もが知る存在ではなく、一部の民俗学者や専門家が知るだけの存在であった。では、知名度の低かった座敷童は、作中でどのように描かれ、その存在を知らない都会の読者にいかなる読みを可能としたのだろうか。

本論では本作以前に発表されていた柳田国男の『遠野物語』(14)(以下『遠野』)、佐々木喜善の『奥州のザシキワラシの話』(15)(以下『奥州』)の座敷童と本作の座敷童を比較する。これらの作品を賢治が読んでいたのかは定かではない。しかし、続橋達雄の指摘が既にあるように(16)、両作には本作と類似の話が散見される。それらと本作を比較し、作中の描写を考察することで、本作の独自性を探ると共に、座敷童という題材がいかなる意味合いを持って読めたのかを明らかにする。

本作は、「ぼくらの方」とされる地域の座敷童に関する四つの話から構成されている。「ぼくらの方の、ざしき童子のはなしです。」という書き出しからは、本作が「ぼくらの方」とは異なる場所にいる読者に向けられていたこ

とが読み取れる。西田良子はこの書き出しに対して「東京という中央での出版を意識した観」(17)があると指摘しており、この書き出しが『月曜』が想定した都会の大人という読者像に向けられていたと考えることも可能だろう。では、「ぼくらの方」とは異なる場所にいる読者に、座敷童に関する四つの話はどのように読めたのだろうか。

三・一 立ち現れる「故郷」

第一の話では読者それぞれに「故郷」を連想させる「田舎」が描かれる。賢治は生前未発表の「ペンネンネンネン・ネン・ネムの伝記」(以下「ペンネン」)でも本話と類似の座敷童を描いている。「ペンネン」では架空のばけもの世界が舞台とされるが、座敷童が八畳座敷を箒で掃いているのを子どもが見つけ、驚いて気絶した事件が描かれる(18)。ここでは、本話と異なり、座敷童の姿を視認したことが気絶の要因となっている。また、『奥州』の類似の話では、赤顔の童が現れる話に続いて足音が聞こえる話がなされ、二つの話を関連付けて読む構図で描かれていた(19)。一方、本話では箒の音が聞こえるだけで座敷童の姿は確認できず、座敷童という存在がどのような姿をしているのかは全く分からない。

四つの話から構成された本作は、(一)音だけが聞こえ

る、(二)認識できない存在、(三)認識可能な存在、(四)移動、と話が進むにつれて座敷童が徐々に姿を現す構図で描かれる。第一の話で、ひっそりとした刀の箱と箆の音が対比されることで音が強調されているのもこの役割による。

音を印象的に読ませる第一の話は同時にその場の風景を強く印象付ける。この話で強調される風景は、山と川の近くにあり、檜の垣根に囲まれた、複数の座敷を持つ屋敷である。北田耕也は唱歌「故郷」を例に「日本人の故郷のイメージというのは、結局、山の辺十水の辺の故郷なんです(20)」と日本人の故郷観を述べているが、本作の風景もこの「日本人の故郷のイメージ」に類似したものだといえる。また成田龍一は、このような「故郷」が、現実の場ではなく、語られることで、構成され、想起される時間・空間として存在していたとした上で、移動によって形成された近代都市空間におけるアイデンティティが「故郷的なるもの」、「都市的なるもの」の複合によって形成されていたことを指摘している(21)。

第一の話で座敷童はその姿を現さない。この謎の存在を見極めようと読み進める読者に示されるのは、山と川の近くにあり、檜の垣根に囲まれた、複数の座敷を持つお屋敷の「お日さまの光ばかり、そこらいちめん、あかるく降つて」いる座敷である。このような特徴を持たな

い本話の「田舎」は、読者にそれぞれの「故郷」を連想させる。本話では座敷童によって風景が強く印象付けられることで、作中で描かれた「田舎」に読者が各々にとつての「故郷」を読み込むことが可能となっていた。

第一の話で描かれた「故郷のイメージ」を備えた「田舎」は、読者にそれぞれの「故郷」を連想させる。そして、このような「故郷」を「田舎」から連想させるという本話の方法は、「わづらはしい生活」に疲れた都会の大人を「ホツと」させるといふ掲載誌の編集方針とも合致している。

三・二 懐かしい過去

第二の話では座敷で遊ぶ子供たちの姿が描かれる。この話には「大道めぐり」という遊びが登場する。『奥州』の類似の話において人数が増える現象は、運動場で遊んでいる際や体操の時(22)に発生しており、具体的な遊びは描かれていない。では、本話にはなぜ「大道めぐり」という遊びが描かれたのだろうか。この遊びについて『定本宮沢賢治語彙辞典』は「大道回。どうどうめぐり、とも。昔からある子どもたちの遊戯の一。カゴメカゴメに類するもの。」(23)と解説している。ただ、本話の描写からは、この遊びが集団で行うものだということは読み取

れるものの、その詳細は判然としない。「大道めぐり」とはいかなる遊びだったのだろうか。

『遊びの大辞典』は、列を作り、円周をまわる、巡る遊びを「めぐり」と総称し、一八三〇年の喜多村信節『嬉遊笑覧』の「童のどうどうめぐりハ、行道めぐりなり」との言葉を紹介している⁽²⁴⁾。また、『吾妻余波』(一八八五年刊)に収録された「東都子供あそびの図」などを参考に江戸の町における遊びを解説した『江戸の子供遊び辞典』は、同様の紹介をしたうえで、「どうどうめぐり、こうめぐり」との歌と共にぐるぐる回りながら行う遊び方を紹介している⁽²⁵⁾。本話では歌が微妙に変化しているなど細かな違いも見られるが、「大道めぐり」も「めぐり」の一種だと考えられる。ここでは東京でも行われた遊びの変種が描かれ、歌が変化することで地方性が強調されながらも、都会の大人にも理解できる遊びが描かれている。「大道めぐり」は読者に共感できる子供時代を連想させる。

また、この話では遊んでいる最中に人数が増えているという現象が描かれる。「大道めぐり」という、子供同士が混ざり動く遊びが描かれた理由は、この現象を強調するためであった。この現象はお互いを良く知らない子供たちがお振舞いに呼ばれたことで引き起こされる。本話で座敷童はお振舞の集まりというよく知らない親族ま

でもが一堂に会する空間を前景化させる。

本話で座敷童は、「大道めぐり」を通じて読者に子供時代を思い起こさせる。同時に、この現象を引き起こすきっかけとなった見知らぬ親族までもが一堂に会する空間も、都市空間で生活する人々には懐かしい風景として読めたはずだ。

三・三 失われゆく接客空間

第三の話では続き間の座敷という接客空間が強調されている。本話では第一、第二の話に続き、座敷が連なる広い空間が描かれる。特にこの話では子供たちが家の中を動きまわることで、広い家が想像し易くなっている。

本作では座敷童の家移りに関する第四の話を除いて大きな家の続き間の座敷が舞台とされており、座敷という空間が強調されている。座敷童を題材とする本作が座敷を舞台とすることは一見妥当に思われる。しかし、類似の話や『遠野』『奥州』を確認すると、座敷童の出現場所は必ずしも座敷とは決まっておらず、前述した第二の話に類似する『奥州』の話では運動場がその出現場所となっていた。繰り返し描かれる大きな家の続き間の座敷という空間は、読者にどのような印象を与えたのだろうか。本作の読者として想定された都会の大人が生活していた

都市部の住宅を確認したい。

明治期の都市中流住宅は武家宅をモデルとしたものが多く、そこには次の間、座敷と繋がる接客空間が存在していた⁽²⁶⁾。この広い空間は冠婚葬祭や接客などに使用され、家の中にありながら一種の公的な空間であり、普段は使用されない場所であった。家を守る神であると同時に、家を守る客神でもあるという座敷童の性格は、座敷という空間が持つ二重性を体現している⁽²⁷⁾。また、普段大人たちが入らないこのような空間に、近所の子供がこっそり入り込み遊ぶ姿は、座敷童の起源の一つとされる⁽²⁸⁾。普段使われない空白の空間だからこそ、ここに座敷童が出現する余白も存在したのである。

ところが、大正年間に入ると、それまで重視されていた接客や儀礼よりも、家族や個人の生活が重視されるようになっていく。大正末年には、座敷は玄関の近くに配置されることで個人の空間の確保が計られ、普段使いに適さない広い続き間の接客空間は姿を消し、狭い家では主人が普段使いする居間が接客空間としても兼用されるようになった⁽²⁹⁾。このような住宅合理化の背景には、公的な空間よりも私的な空間を重視するという思想が見て取れるが、同時に、都市人口の増加による都市部での人口過密という問題も読み取れる。また、座敷の代わりに土足で入ることの出来る応接間と、家族が使用する私

室としての和風の生活空間を持った和洋折衷の文化住宅も多く建てられていった⁽³⁰⁾。本作で座敷童が現れる続き間座敷の広い接客空間は、個人の生活と空間の合理化が重視される大正末年の都市部において失われつつある空間であった。

本作では、都会では失われつつあった続き間座敷の接客空間が何度も描かれ、本作の座敷童はこの空間と強く結びついた存在として描かれる。勿論、大正末年の東北地方には南部曲家などの多くの大きな家があったであろうし、各地方には地方ごとの家屋の形態が存在する。しかし、本作で描かれる家は、大きいという以外の特徴は明示されておらず、どの地方にも当てはまりそうな座敷を持つ大きな家として描かれていた。このどこにでも当てはまる大きな家の座敷という空間と強く結びついた本作独自の座敷童は、読者に都会では失われつつある接客空間を思い起こさせる。ここでは読者それぞれの「故郷」を刺激する空間としての座敷が強調されている。

三・四 座敷童の利益

第四の話では座敷童の家移りによる栄枯盛衰が描かれる。『奥州』の類似の話を確認すると、「その後山口の家の主従三十人ばかり、茸の毒にあたって一夜のうちに皆

死絶えた」⁽³¹⁾と描かれており、座敷童がいなくなった家の人間は一夜のうちに死に絶えたとされている。ここで強調されるのは座敷童がいなくなった家に起こった不幸であり、その家の衰亡である。『奥州』の他の話でも、座敷童が家を移った際に詳しく語られるのは火事、病氣、急死といった衰亡する家の出来事が多く、座敷童が移った家については、現在も栄えている、裕福な家などの抽象的な表現に留まり、利益の具体的な内容を詳しく語ることは珍しい。一方、本話では、「それから笹田がおちぶれて、更木の斎藤では病氣もすつかり直つたし、むすこも大学を終つたし、めきめき立派になつたから」と、斎藤家にもたらされた利益の具体的な例を挙げながら、立派になつたと語られる。本話で強調されているのは、笹田の衰亡ではなく、斎藤家にもたらされた利益である。本話で座敷童は明確な利益を与えてくれる福の神としての側面を強調して語られる。その結果、佐々木が座敷童に感じた「何かしらその物の本来が、私たちの一生の運不運と関係があるようで、畏敬の念さえ払うようになって」⁽³²⁾という大いなる存在に対する畏れは薄められている。本話の座敷童は、わかりやすい利益を持ち、神様らしい姿で描かれる。ここで座敷童は、その存在を知らない読者にとつて、わかりやすい利益を持った福の神的存在として読む事が出来る。

次に本作の座敷童がもたらす利益の内実を探っていきたい。座敷童は家の栄枯盛衰に関わる存在である。本話で描かれた利益のうち、病氣が治つたという特徴は家の存続にも繋がり、座敷童の特徴と矛盾しない。しかし、「大学を終つた」という特徴は果たして座敷童的な利益の在り方だったのであろうか。「立派になつた」との言葉からは、息子は大学卒業後、地元に戻つて家業を継ぎ、その結果、家が栄えたと考えることも可能だ。また、この話は渡し守によつて語られており、田舎の人々にとつて大学を卒業することが立派で価値があると考えられていたことも窺われる。ただ、本作の読者対象とされた大正末年の都会の大人達にも、「大学を終つた」事は立派なものとして読めたのだろうか。大正末年における高等教育機関卒業者の就職状況を確認したい。

本作が発表された大正末年、大学卒業者を含めた高等教育機関卒業者は就職難に直面していた。この就職難は、第一次世界大戦による大戦景気の際、高等教育機関が大量増設されたことを遠因とする。大学と専門学校を加えた高等教育人口は一九一八年から一九二六年までにほぼ倍増し、このような高等教育人口の増加が第一次世界大戦後の労働需要の減退とぶつかり就職難が発生した⁽³³⁾。その結果、高等教育機関卒業者の就職率は一九二三年の七八%から一九二六年には五九・一%まで下落し⁽³⁴⁾、

この後、金融恐慌を経て「大学は出たけれど」との言葉が流行する時代に繋がっていく。

このような就職難の中で、座敷童のおかげで大学を卒業し立派になった息子の姿は、就職難の中でも立派になれる座敷童の利益を強く印象付ける。座敷童の利益は、現実で起こっている問題を題材とし、それを乗り越えさせることで、座敷童という存在を知らない読者にも説得力を持って読めたのではないか。一方で、就職難という現実的な問題を題材とした明確な利益は、読者に上手く就職できなかった現実の多くの大卒者の存在をほのめかすことにも繋がったはずだ。座敷童の利益を具体的な社会問題と絡めることで読者にわかりやすい形で提示した本作は、結果として、読者に就職難という具体的な社会問題を思い浮かべせることにもなったのではないか。

また、本話は読者と同じ時間軸に存在する語り手「わたし」が渡し守から直接聞いた話として描かれる。本作では、読者と同じ時間軸に立つ語り手が最後に現れることで、刀の箱が描かれるなど過去の話とも取れる他の話が、同じ座敷童という存在について語る「わたし」の語りを通じて「今」に繋がらされている。このような本作の構造は「今」と繋がる過去の空間を立ち表せる。ここまで見てきたように、本作で描かれた過去の空間は「故郷」や子供時代を思い起こさせた。本作では、このよう

な過去の空間が「今」に繋がられることで、「今」は都会で暮らす大人たちにそれぞれの懐かしい空間としての「過去」を思い起こさせる。

本話では、「ぼくらの方」が、座敷童によって懐かしさを強調されつつ、読者それぞれが共感しやすい様々な工夫がなされたうえで描かれていた。本作のこういった描写は都会の大人を「ホツ」とさせるという『月曜』の編集方針と軌を一にしている。また、本作の座敷童は過去の空間と結びつけられることで読者に懐古的な感情を呼び起こさせる。「故郷」や子供時代と重ねられることで穏やかなイメージで語られる過去の空間は、都会での「わづらはしい生活」という「今」があるからこそ成立し得たものであった。本作を大正末年の都会の大人という発表誌が想定した読者像から読む時、そこには工業化による都市生活という現実を背景に、都会とは異なる「故郷」や子供時代を思い起こさせる場所としての「田舎」が見出せる。同時に、このような「田舎」の背景に、都会での厳しい現実をほのめかす本作は、『月曜』の編集方針から外れた作品として読むことも可能であった。

ここまで、『月曜』が想定した都会の大人という読者を中心に本作を読むことで、本作の背後に都会をめぐる様々な問題が読み込めたことを明らかにした。では、都会の人々から理想的な空間という欲望のまなざしを向け

られた田舎は本作にどのような読みを与えるのだろうか。本作の舞台とされる「ぼくらの方」を考察することで、本作を巡るもう一つの同時代状況を明らかにしていきたい。

四 観光産業と「田舎」

本作で登場する地名は北上川、朗明寺、更木である。天沢退二郎は、花巻から北上川を挟んで対岸にある更木という土地と、更木の船着き場近くにあった永明寺をモデルとして挙げ⁽³⁵⁾、佐々木は本作を「多分花巻辺のことだらう」と推測している⁽³⁶⁾。北上川の瀬の音が聞こえる第一の話から始まり、第四の話が北上川の渡し守で終わることからも「ぼくらの方」は同地域が舞台になっていると考えられる。しかし、前号に掲載された「オツベルと象」は象が生息する土地が舞台とされており、ここでは必ずしも地方性は重視されていなかった。花巻近辺を舞台とすることにはどのような意味があったのだろうか。

花巻市は岩手県中西部に位置する町である。本作が発表された大正末年、花巻には大きな変化が起こっていた。その変化の中心となったのは花巻温泉である。一九二三年に営業を開始した花巻温泉は、一九二五年には、多く

の客室を備えた旅館千秋閣、貸別荘、遊戯場、動物園が完成し設備が整うと共に、西花巻―花巻温泉間の電車鉄道が開通したことで都市部からも訪れやすい温泉地となっていた⁽³⁷⁾。賢治の父政次郎はこの路線を敷いた盛岡電気工業株式会社に合併された花巻電気株式会社の取締役をつとめており、賢治自身、一九二四年に大通りに桜の苗木を植え、後には花壇設計にも関わるなど、花巻温泉と深い関わりを持っていた。交通の便が良く、近代的で、大人数が収容可能なこの一大レジャー施設は、都市部から多くの観光客を花巻に呼び寄せることになる。

観光客の急増は観光産業を隆盛させる。大正末年の花巻では観光客向けの商売が喫緊の課題とされていた⁽³⁸⁾。当時、花巻の観光土産として注目を集めたものに花巻人形と台焼きが挙げられる。どちらも古くからの地元の土産品であったが、遠隔地から訪れる観光客向けの観光土産とするために、花巻人形は新しいデザインへの変更が、台焼きは個人経営の少量生産から大量生産体制への移行が急務とされていた⁽³⁹⁾。このように大正末年の花巻では観光客を目当てとして、地元の特産品のデザインや生産体制の変更が行われていた。

では、観光客に向けたデザイン変更とはいかなるものだったのか。花巻人形は『赤い鳥』の挿絵画家として知られていた深沢省三の手により「東北人形」として作り

変えられることになる(40)。この時、重要視されたのは、「お国自慢の民謡、風物をドン／＼作品の上に取り入れ」ることであり、それが「郷土の紹介に資する」と考えられていた。大正末年の花巻において、郷土とは、単純に土着、既存の文化を指すのではなく、土着、既存の文化を都会向けに再創造することによって創り出されるものであった。このような花巻人形を巡る動きからは、都会から理想的な場所とされた田舎が、都会からの視線を意識し、そのイメージに沿った場所を自ら作り上げること
で商売に利用していたことが確認できる。

また、花巻に観光産業の隆盛をもたらすきっかけとなった花巻温泉でも、昭和初期には観光宣伝として鹿踊りや田植え踊りのキャラバン隊をトラックで東京に送り出すなど(41)、都会に対して郷土が提示されていた。花巻温泉は、その役割を「病後の静養地ではない、ビジネスに疲れた人々が瞬間的な感覚の旋回で精力と健康とに立ち戻る為めの温泉郷だ」(42)としていた。花巻温泉が掲げた疲れた人々を癒すというテーマは、『月曜』の編集方針と類似している。次号に掲載された「寓話猫の事務所」では、事務所相談の内容が、初期形の戸籍調査から、発表形式では旅行相談へと変更されている。賢治もまた大正末年から昭和初期にかけて隆盛した観光産業に興味を持った一人であった。

賢治の作品には地方性の豊かな作品が多くみられる。しかし、本作が描かれた大正末年において、郷土は、単に都会から離れた土地ではなく、都会の人々によって理想化され、同時に田舎の人々もそのイメージを商業に利用する場となっていた。都会向けに再創造された地方の妖怪座敷童を描くという本作の手法は、大正末年の花巻で観光を背景に行われていた、都会に対して郷土を紹介するという手法に類似している。

では、本作は単純に当時の観光的手法から花巻を紹介しただけの作品だったのだろうか。前述したように、本作は都会の大人の「田舎」に対する欲望を満たす読みが可能な作品であった。しかし、当時の読者が解説なしに本作の舞台を花巻と判断することは難しく、北上川から東北だと判断するのが関の山である。また、永明寺の名前の書き換えからは、本作が実在の土地と距離を置こうとしていたことが読み取れる。すべての話を「ぼくらの方」としか紹介しない本作は、『遠野』『奥州』が各話ごとに細かな地名を明らかにしているのと比べると、特定の地域に限定されることを拒んでいるといえる。さらに、定型の姿がなく、様々な座敷に現れるも最終的には家を移ってしまう座敷童は、形にして観光土産にすることも、特定の観光地と結びつけることも難しい存在として描かれる。読者に「田舎」を提示し、一見観光的文脈で読め

そんな本作は、当時の観光産業とはうまく結びつかない。

大正末年から昭和初期にかけて観光産業は隆盛を見せ
ていく。このような観光ブームの背景として、一九一九
年に制定された史蹟名勝天然記念物保存法、一九二〇年
に発足した鉄道省、内務省の国立公園制定運動などが各
地で観光をめぐる運動を活発化させていたことが挙げら
れる。大正末年から昭和初期にかけて郷土は観光を背景
に日本全国で急速に作り上げられていった。

しかし、観光産業の隆盛は必ずしも肯定的に受け入れ
られたわけではない。柳田国男は、旅が簡易になり過ぎ
た結果、経験が欠如することを嘆いている⁽⁴³⁾。他にも、
観光産業に対する過度な投資への批判⁽⁴⁴⁾や、これまで
培われてきた風情が規制されることへの不満⁽⁴⁵⁾が確認
できる。都会向けの商業的な観光は、一方で、旅行の形、
土着の文化に変化を与えてもいた。岡村民夫は、後に紅
燈化や日本新八景運動などを要因に花巻温泉を批判的に
見る賢治が、一九二六年までは花巻温泉に夢を託してい
たのではないかと推測している⁽⁴⁶⁾。賢治もまた商業色
の強い観光産業に対し複雑な思いを持った一人だった。
理想的な「田舎」を描きながらも、北上川流域という地
域のみを明らかにし、観光に繋がるような土地を明示し
ない本作からは、必ずしも肯定されるだけではなかった
大正末年の「田舎」をめぐる複雑な観光観を読み取るこ

とが出来る。

本作が掲載された雑誌『月曜』は、「わづらはしい生活」
に疲れた大人を「ホッ」とさせることを目標として掲げ
ており、特に本作掲載号である『月曜第二号』では編集
方針の再確認が図られていた。本作は煩わしい生活を送
る都会の大人に独自の座敷童像を通じて懐かしい「田舎」
を提示する。都会の大人にとつて本作は、『月曜』が目指
した「ホッ」と気を抜く作品として読む事が出来る作品
であった。だが、この「田舎」は、住宅開発、就職難と
いった社会問題をその背後に有してもいた。本作で描か
れた「田舎」からは理想を希求するきっかけとなった都
会の問題が窺えもする。

本作が発表された大正末年、「田舎」は観光産業を背景
に日本各地で作りに上げられていた。それは大正期に入っ
て急速に発達した都市生活から一時的であれ解放されたい
という人々の願望の発露でもあった。一方、都会から
理想化された田舎では、そのイメージを利用した観光産
業が勃興していく。賢治の故郷である花巻でも、都会に
対して郷土的な土産物の開発や、鹿踊り、田植え踊りな
どの伝統芸能といった「田舎」らしいものが提示されて
いる。だが、これらの具体的な文物を都会に紹介してい
く観光産業の手法に対し、無名の形もはつきりしない妖
怪を、東北としかわからない「ぼくらの方」を舞台に描

く本作は、当時隆盛を見せていた観光産業とは必ずしも結び付かない。都会の読者からは「田舎」らしい作品として読む事が出来るものの、田舎で勃興していた観光産業とは結び付かない本作は、都市から理想化される「田舎」と商業的に開発される現実の田舎の狭間に成立した、大正末年における「田舎」を巡る物語であった。

*本文引用は『月曜第一巻第二号』恵風館、一九二六年二月による。

*本論は日本近代文学会二〇二一年度春季大会での口頭発表に加筆、修正を施したものである。

注

- (1) 吉田精一「解説・鑑賞」『鑑賞宮沢賢治選集』天明社、一九四九年五月
- (2) 異聖歌「解説」『宮沢賢治童話集(下) 銀河鉄道の夜』新潮社、一九六一年七月
- (3) 境忠一「童話」『評伝宮沢賢治』桜楓社、一九六八年四月
- (4) 乙骨淑子「賢治の郷土童話の素材とその形象化——」『ざしき童子のはなし』と「なめとこ山の熊」から——『四次元第十一巻第八号』宮沢賢治研究会、一九五九年八月
- (5) 続橋達雄「賢治童話と民話」『日本児童文学第二〇巻第五号』盛光社、一九七四年五月

(6) 鎌田東二「宮沢賢治の妖怪物語」『南方熊楠と宮沢賢治 日本的スピリチュアリテイの系譜』平凡社、二〇二〇年二月

(7) 西田良子「オッペルと象」の再検討 賢治童話の系譜におけるその異質性」『日本児童文学第二〇巻第六号』すばる書房盛光社、一九七四年六月

(8) 米地文夫「宮沢賢治「猫の事務所」と郡役所廃止——政治的世界・民俗的世界・賢治の内面世界の重層性——」『総合政策第九巻第一号』岩手県立大学総合政策学会、二〇〇七年二月

(9) 尾形亀之助「編集後記」『月曜第一巻第一号』恵風館、一九二六年一月

(10) 速水融、小嶋美代子「農業国」から「工業国」へ」『大正デモグラフィ 歴史人口学で見た狭間の時代』文藝春秋、二〇〇四年一月

(11) 尾形亀之助「編集後記」『月曜第一巻第二号』恵風館、一九二六年二月

(12) 佐藤憲一「妖怪紀行」(4)「座敷わらし」『読売新聞夕刊』二〇〇八年八月一九日七面

「赤顔おさげ髪の子供の姿で由緒ある旧家に現れ、家を富ませるが、去ると家運が傾くという座敷わらし。(中略)面白いのは、現代でもこの遠野を情報発信地として、座敷わらしが息づいていることだ。」

(13) 佐々木喜善「雨窓閑話」『天邪鬼五の巻』一九二八年七

月（引用は『佐々木喜善全集（四）』遠野市立博物館、一九八七年五月による）

（14）柳田国男『遠野物語』聚精堂、一九一〇年六月

（15）佐々木喜善『炉辺叢書第三編 奥州のザシキワラシの話』玄文社、一九二〇年二月

（16）続橋達雄「童話「ざしき童子のはなし」」『賢治童話の展開——生前発表の作品——』大日本図書、一九八七年四月

（17）西田良子「ざしき童子のはなし」『宮沢賢治を読む』創元社、一九九二年二月

（18）宮沢賢治『ペンネンネンネン・ネネムの伝記』【新】校本宮沢賢治全集第八巻本文篇』筑摩書房、一九九五年五月

（19）佐々木喜善「奥州のザシキワラシの話」『遠野のザシキワラシとオシラサマ』中央公論新社、二〇〇七年七月

（二〇）土淵村字山口に、瀬川九平殿という家がある。この家が今から五十年ほど前、まだ分家をしたばかりで、本家と小川を一筋隔っていた頃の事である。

家の人たちは皆畑へ出て行って誰もいないのに、座敷の所の障子の隙間から、赤い頭巾を被った赤顔のワラシが、外へ手を出しては又内に引込め、余念もなく遊んでおるのを、本家の爺様などがよく見たものだという。又家の人たちが田畑へ行っていて、何

か用事でもあつて、時でもない刻限に帰って来たりすると、茶の間などにとたとたと、三、四歳の子供の戯れ遊ぶような足音がしていたものであつたという。」

（20）北田耕也「懐かしき家郷と立身出世の夢」『近代日本少女感情史考 けなげさの系譜』未來社、一九九九年一月

（21）成田龍一「アイデンティティの空間」『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』吉川弘文館、一九九八年七月

（22）前掲書『遠野のザシキワラシとオシラサマ』

（二三）土淵村字本宿にある村の尋常高等小学校に、一時ザシキワラシが出るという評判があつた。諸方からわざわざ見に来たものである。児童が運動場で遊んでおると、見知らぬ一人の子供が交つて遊んだり、また体操の時など、どうしても一つ余計な番号の声がしたという。それを見た者は、常に尋常一年の小さい子供等の組で、それらがそこにおるここにおるなどといっても、他には見えなかつたのである。」

（23）原子朗「大道めぐり」『定本宮沢賢治語彙辞典』筑摩書房、二〇一三年八月

（24）小高民雄「めぐり」『遊びの大辞典』東京書籍、一九八九年六月

(25) 中田幸平「どうどうめぐり」『江戸の子供遊び辞典』八坂書房、二〇〇九年六月

(26) 青木正夫「明治以降の住様式の変化・発展に関する一考察」『住宅建築研究所報第一二巻』一般財団法人住総研、一九八六年五月

(27) 川島秀一「ザシキワラシの「座敷」」『ザシキワラシの見えるとき 東北の神霊と語り』三弥井書店、一九九九年四月

(28) 吉田高子「座敷に出る妖怪」『物語ものの建築史 座敷のはなし』鹿島出版会、一九九八年一月

(29) 後藤治「生活様式の変化と住宅」『日本建築史』共立出版、二〇〇三年七月

(30) 平井聖監修「和風と洋風との統合」『建築史増補改訂版』市ヶ谷出版社、二〇一〇年一〇月

(31) 前掲書『遠野のザシキワラシとオシラサマ』

(32) 前掲書『遠野のザシキワラシとオシラサマ』

(33) 「学生生活と卒業後の雇用構造」『日本近代教育百年史 第五卷学校教育三』教育研究振興会、一九七四年八月

(34) 天野郁夫「就職難と学歴主義の時代」『高等教育の時代 (下) —— 大衆化大学の原像』中央公論新社、二〇一三年三月

(35) 天沢退二郎「注解」『注文の多い料理店』新潮社、一九九〇年五月

(36) 前掲書「雨窓閑話」

(37) 佐々木幸夫「花巻温泉誌」『花巻温泉物語』熊谷印刷出版部、一九八八年七月

(38) 「花巻に物産館を建設したい」『岩手日報 朝刊』一九二六年一月十二日 三面

「かく夥しい客が年々温泉方面や三りく沿岸に行くため必ず花巻町を通過するが当地の商人は付近農村を相手としこの乗降客を閑却してゐる傾向がありやしないか」

(39) 「愈復活する花巻人形 花巻温泉を中心に色々な産業勃興」『岩手日報 朝刊』一九二五年十二月二十二日 三面

「稗貫郡部の温泉を中心に幾多の新しき産業がだん／＼勃興しかけてゐる。先づ第一に数へられるのは歴史も古く相当販路のあつた花巻人形は最近著しくすたれた傾向があり、地方発展のため頗る遺憾なのでこれを花巻温泉名物の一つに加へ斬新な意匠を加へ木製玩具としてうり出すべく過般来花巻川口町の一有力者が奔走中である。又台焼きは近年需要も著しく激増し精巧なものがドン／＼県外に輸出され信用を博してゐるが現在個人経営であるため一々その需要に応じ切れない状態に鑑み原料も豊富であるしこれを会社組織とし大量生産の方法を講ずべしとの意見がありいづれ遠からず実現することであらう」

(40)「郷土味タツプリの「東北人形」深沢画伯が「花巻人形」

に民謡風物を取入れて花巻温泉で製造」『岩手日報 朝刊』

一九二六年四月八日三面

「青年画伯深沢省三君は今回郷土の文化の為に花巻人形の改造を思ひ立ち地元の人々と花巻温泉場に玩具の製作工場を経営する事になった。(中略)それで画伯の同志たちは今後『搦め踊り』や『チャグ／＼馬』『金のベコ』などいふお国自慢の民謡、風物をド／＼作品の上に取り入れて優美な雅致ある玩具を此夏から売り出す目論見らしく『東北人形』と名づけ材料や顔料を精選して大いに郷土の紹介に資する」

(41) 前掲書『花巻温泉物語』

(42) 第三評論「温泉禮贊」『花巻温泉ニュース第二号』花巻

温泉、一九二九年八月

(43) 柳田国男「旅行の進歩及び退歩」(一九二七年二月駒場

学友会講演)『新編柳田國男集第三卷』筑摩書房、一九七八

年六月

(44) 島浪男「四国遍路(四)」『旅第五卷第七号』日本旅行

協会、一九二八年七月

「一體、一府県の経済が産業を以つて立つか、風景を売物にして立つかと言ふ事は六つかしい問題ではない。言ふまでもなく一府県の経済も一家の経済と同じく額に汗して土に耕し水に漁る積極の方策こそ上

乗なものであつて、遊覧者の懐目当の消極的経済策に墮す可きではない。」

(45) 田中千曲「かはりゆく湯の街(山中温泉)」『旅第四卷

第六号』日本旅行協会、一九二七年六月

「客待つ湯女が謡ふ『山中節』を湯槽にひたりながらウト／＼聞いてゐるのも一つの温泉情緒でこれがまた他の温泉では味へぬものであつたか、いつか姿を消してしまつた、風紀上よろしくないとおつて、今から七年前にこの習慣を廃止したのだといはれてゐる。」

(46) 岡村民夫「賤舞の園を供すとか」『イーハトーブ温泉学』みすず書房、二〇〇八年七月

(はっとりたかひろ／本学大学院博士後期課程)